

アメリカ幻想記

福元 希高

里見嵐三郎

春、桜の花びらが風に舞って、隅田川の川辺が桃色に染まり、ゆつたりと流れる様を楽しげに眺めながら歩む青年がいた。

武家のいで立ち、すらりとした長身、青年の名は本編の主人公、里見嵐三郎。生家は直参旗本の家系、とは言っても小禄、しかも次男坊、登城の務めもなし。早くに両親とも病死、家督は歳の離れた兄が継いで、その兄には嫁と二人の男子がいた。兄はおっとりとした気性で、歳が離れているせいか、弟の嵐三郎のすることに寛容であった。しかし兄嫁とは何かと折り合い悪く、どうにも気が合わず、その度、肩身の狭い次男の居候の身には居心地悪く、いずれ家を出たいと考えていた。

今日も剣術の稽古で、神田小川町にある幕府講武所に通って、一汗かいての帰路、ふらりと花見がてら、ある家に向かう途中であった。

嵐三郎は元々剣術が嫌いであった。自分では体質的に学問の方が性に合っていると思っている。汗を流して木剣を振る組太刀、竹刀での立ち合い、いずれも根が臆病のため大の苦手であった。入所す

るきっかけは嵐三郎の幼馴染で遊び仲間、兄貴分の勝麟太郎（海舟）が同門であり、その口添えがあつたためである。

入門して始まった型の稽古、竹刀での立ち合い稽古、どれを取ってもからつきし駄目、門弟たちからは呆れられ、からかわれの毎日。

挙句に高弟師範代たちから、

「お前は竹刀よりも箒と雑巾が似合う。道場の隅に控えておれ。稽古後の掃除を任せる」

とまで言われてしまう有様。だが、彼の明るく屈託のない性格がその場を和ませるのか、めげずにせつせと道場を掃除する姿を同門たちは何となく好感の目で眺めていた。

幕府が開設した講武所は、旗本、御家人たちの子弟が入門する武術の道場であり、そこでは剣術、柔術、洋式武道、砲術などを教授する。全てを取り仕切る頭取は直心影流名手「幕末の剣聖」と後世謳われた男谷精一郎信友で、剣術師範役を兼務していた。

道場の高弟の一人、勝海舟の口利きで入門した手前、師範代たちもたまには嵐三郎に稽古をつけようとする。

「おい、嵐三郎、稽古をつける。竹刀を持って」

高弟師範代の一人が声をかけて道場の中央に進み出た。呼ばれた嵐

三郎はぎよつとした表情のあと、渋々立ち上がり前に出た。竹刀を合わせ、二人は距離を取り対峙した。が、一向に嵐三郎からは仕掛けない。

「どうした、打ち込んで参れ」

と叫んでも身を硬くして一步も前に踏み込めない。いつものことだ。

「ならばこちらから参るぞ」

師範代がじりつと間合いを詰め、

「つえっとう」

叫んで打ち込む。嵐三郎は思わず受ける。ばしんと竹刀の弾ける音。

「うぬっ」

再び打ち込む。受け返す。身をかわず。嵐三郎は退きながら受ける、かわす、左右に逃げる。師範代が連続で打ち込んでくるも、巧みに受ける、かわすの繰り返し。一度も打ち返せず、だが絶対に打たれない。何度も何度も気合を込めて師範代が打ち込むのだが、どうにも当たらない。全て受けてかわすのだ。

「こりや、どうにもならん。臆病者めが」

言葉を吐き捨てて師範代は対決をやめてしまった。その後、高弟たちが入れ代り、立ち代り勝負するのだが、結果は同じ。こういう日々

が続いて、とうとう師範代たちからは、呆れて匙を投げられてしまった。

事の顛末をじっと見ていた人物がいた。頭取の男谷精一郎である。彼は師範役席から一部始終を無言で見ていた。ある日、嵐三郎は男谷頭取に呼ばれた。頭取室に入り、面前に平伏する嵐三郎に男谷が声をかけた。

「里見、お前は本日よりこれを遣え」

差し出したのは小太刀用の木剣であった。男谷が言う。

「儂はこの数年、小太刀の研鑽に日々を費やしておく。無論、我が流派、直心影流にも小太刀の位という武技はある。それらは狭い空間にての勝負、または複数の敵との防御、或いは長時間の太刀打ちにての体力の限界、これらのために小太刀を遣う剣法が編み出された。だが儂は、これらの剣法にもうひと工夫加えたしと思ひ、新しい技を考案中なのだ」

嵐三郎は恐る恐る恩師の顔を見上げた。

「儂の見たところ、お前は剣さばき、防ぐ技に長けている。臆病なものもあるが、相手の動きを咄嗟に見抜く眼力が備わっている。言ってみれば臆病による天賦の才か。はははは」

男谷が愉快そうに笑った。

「どこの流派にもある後の先というやつだ。相手の出ようとする動きを咄嗟に読み取り先を取る。剣法の神髄だ。お前はこれより儂の指導の下、小太刀による防御の技、防ぎながら相手を打つ、後の先を学ぶとよい」

その夜、嵐三郎は興奮して一睡もできなかった。

こうして始まった男谷精一郎と嵐三郎の昼夜に亘る連稽古。男谷は大刀用の竹刀、小刀用の竹刀と持ち替え、時には大小二刀の竹刀を手に持つこともあった。打ち込む男谷に嵐三郎が受けながら打ち返す早業。その繰り出す小竹刀を、男谷が二刀のいずれかを使って弾き返す。手練の早業、後の先を極める厳しい連稽古が続いた。

剣聖男谷の教えが水に合ったようで、嵐三郎は人が変わったように稽古に明け暮れ、めきめき上達していった。数名いる師範代のどの剣士と申し合い稽古をしても、防御は完璧で一分の隙もなく、打ち込ませない。しかも受けながら必ず相手のどこかを打つ。師範代たちは打ち込んで打たれる、その繰り返し。段々効いてきて最後は疲れと痛みに耐えかねて降参してしまふ。形勢が逆転し、今度は師範代の面々が打ち込むことができなくなった。両者互いに踏み込

まない。勝負無し。男谷精一郎唯一人、その様を楽しそうに眺めていた。今や嵐三郎は直心影流男谷道場の、風変わりな小太刀の遣い手として知られるようになっていた。

里見嵐三郎にはこれ以外にも特技があつた。何あろう、外とつ国の言葉、語学であつた。

太平の世、嘉永六年、突然浦賀沖に黒船が襲来。蒸気船を含む四隻が勇壮な姿を現し、世間が大騒ぎとなつた。やがて米国艦隊代将マシュー・ペリーの開国要求に屈し、幕府はついに開国。日米和親条約締結。世の中が大きく動き始めたのであつた。

折しもその頃、万次郎という土佐の若い漁師が、漂流して米国捕鯨船に救われ、かの国に連れて行かれ、数年のち自らの漁船で帰国を果たすという出来事があつた。

万次郎は遭難して伊豆諸島無人島に漂着。米国捕鯨船ジョン・ハウランド号に他の四人の漁師と共に救助された。その後、ハワイで他の漁師を残し単身船員となって米国に渡る。乗組員たちからはジョン・マンの愛称で呼ばれた。船長ホイット・フィイルドの養子となりオックスフォード・ハーレット・アカデミーで語学、測量、航海術、造船技術を学ぶ。サクラメント金鉱にて金採掘の職で得た資

金でハワイに渡り、購入した小舟アドベンチャー号で帰路に就く。

琉球に上陸、取り調べのため支配の薩摩藩に護送される。藩主の島津斉彬は開明家として知られ、万次郎を厚遇する。やがて故郷の土佐に送られるが、土佐でも大歓迎。士分として藩校の教授に任命された。こののち薩摩藩からも洋学校の講師として招かれている。

当時、幕府内では黒船来航以来、これまでの蘭語だけではなく、英・米語、そして何より米国の知識を必要としていた。そこで幕府は万次郎を江戸に招聘し、直参旗本の身分を与え、生まれ故郷、中浜の姓を授け、中浜万次郎と名乗らせた。

中浜万次郎は幕府軍艦所教授に任命され、外国奉行支配の通詞方、翻訳方、通弁方にも語学教授を兼任した。

嵐三郎は旗本の二男、三男の悪餓鬼仲間であり、兄貴分であった勝麟太郎の世話で、万次郎が教授を務める幕府外国奉行支配、通弁塾に通っていた。語学を教える万次郎はいたって気さくな人物であった。出自が漁師だけに土佐訛りが強く、おまけに武家言葉が不慣れ。よく聞き取れないこともしばしばあったが、熱心に教えてくれる教官であった。米国ではジョン・マンといつも呼ばれていたらしい。本人はジョンだけの方が気に入っているようだ。

語学が性に合っていたのか、嵐三郎は上達が早く、すらすら会話ができるようになっていった。ちなみに通詞方、翻訳方とは主に外国語の辞書作成及び翻訳。通弁方は現代でいう通訳である。

その頃、親藩である松江藩から家臣が一人、外国奉行支配、通弁塾に練習生として入塾した。松江藩の先の藩主は、大名茶道として高名な不昧流の祖、松平不昧である。

松江に度々現れる外国船。来航しては無断で上陸する外国人。それらと島民、市民との争乱。藩政の無為無策による民衆の不満。言語が通じぬため起きる事件。今は小事件として治めても、いずれ大事件となり、それが公儀の知るところとなれば、親藩といえどもお取り潰しは免れず。ここに至って、家中に通弁役が必要となり、幕府に願い出て、家臣が一人通弁塾に派遣されたのであった。

その男の名は、服部儀左衛門。松江藩江戸詰役。新藩主の信任厚く、温厚篤実な人柄で家中でも一目置かれる人物であった。

嵐三郎とは親子ほど歳も離れていたが、通弁方の塾生として共に学び、共に励み、仕事にも従事した。出会いから二人は意気投合、互いに人格を認め、親交を深めていった。そして二人が塾生から正規通弁役となる頃には、お互い家族同然の仲となっていた。

やがて、儀左衛門は嵐三郎が旗本家次男であることから、服部家の跡取りに迎えようと考え、一人娘の千尋を引き合わせた。儀左衛門は妻に先立たれ、娘千尋を男手ひとつで育て上げたが、肝腎の跡継ぎがなく、良き縁を得て養子を迎えることを考えていた。

千尋は気立てが良く、ふっくらとした愛嬌のある丸顔で、小柄ながらなかなかの器量よしであった。嵐三郎はひと目見たときからすっきり気に入り、千尋も屈託のない明るい気性の嵐三郎に惹かれていった。そうして嵐三郎は千尋を妻として迎えることを決め、千尋も嵐三郎に嫁ぐことを決心した。相思相愛の養子縁組の話は両家円満にまとまり、とんとん拍子に進んでいった。

話を戻そう。

嵐三郎が向かう松江藩家中服部儀左衛門の江戸住居は、藩上屋敷近くにこぢんまりと佇んでいた。家の近くまでやってきた嵐三郎を、千尋が門前にて待っていた。地味な着物で端然と佇む姿からは、清楚な雰囲気がい、辺りの静寂に溶けいるようであった。

「おお、これは千尋さん。門前での出迎え痛み入る。儀左衛門殿は本日ご在宅か」

人懐っこい笑顔で嵐三郎が訊ねた。

「嵐三郎様、お待ちしておりました。父も部屋にてお待ちしております」

玄関より中に入り、客間に通され、座っていると、

「お待ちせいたした、嵐三郎さん」

満面に笑みを湛えて儀左衛門が入ってきた。

今日は、嵐三郎と千尋の祝言の日取りを決めることになっていた。

二人の打ち解けた話し合いが続き、やがて祝言の日は決まった。藩主参勤交代、お国入りなどの段取りもあり、来年春の大安となった。

こうして嵐三郎は来春、服部家に婿入りし、服部嵐三郎と名を改め将来家督を継ぐことになった。

……やれやれ一年先か、長いな、だがこれで里見家を大手を振って出られる。義姉上とも顔を合わせずに済む。良かった、良かった……。

嵐三郎は内心そう呟き、あとは愛しい千尋への思慕の念を募らせていった。

勝海舟

数日後の夜、自室で寛いでいた嵐三郎に勝麟太郎からの急な呼び

出しがあった。

勝麟太郎という人物、世間では彼のことを海舟という。海舟とは号で、本名は義邦、通称麟太郎。嵐三郎の里見家とは同じ直参旗本小普請組、禄高四拾石余の同格の家柄であった。嵐三郎とは幼馴染で、何をするにも一緒の悪遊び仲間。嵐三郎より少し歳上なので兄貴分として慕っていた。

その勝麟太郎、剣聖と謳われた男谷精一郎とは従兄弟同士、自身も直心影流免許皆伝の遣い手。蘭学塾「氷解塾」を立ち上げ、のち長崎海軍伝習所に入所。そののち江戸に戻って幕府軍艦奉行兼海軍奉行の要職に就く。現在は勝安房守をも名乗っている。

急ぎ勝邸を訪れた嵐三郎を、酒盛りの準備をして麟太郎が待っていた。

「よう、嵐三郎。よう来た。夜分呼びつけてすまねえ」

いつもの市井の伝法口調で、麟太郎が酒徳利を手に持ち、話しかけてきた。

「麟太郎さん、久し振りです」

嵐三郎が答えた。

「ま、飲みながら話そうぜ」

麟太郎に促されて二人は居間の中央にどっかり座り込んだ。

暫くは普段通りの世間話。そしてひと段落後、麟太郎が改まって話を切り出した。

「今夜来てもらった用件というのはな」

ぐいと酒碗を飲み干して、

「いよいよアメリカ国へ行く」

「おお、それは」

嵐三郎が声を上げた。

「米国代将ペリーと幕府の日米和親条約締結なって、今度は日米修好通商条約ときた。おめえも知ってるよな」

「はい、そのことは聞いております」

「さ、そこで条約批准書を交換するために、遣米使節団がアメリカに渡る。俺は海軍咸臨丸の艦長としてその一行に加わる」

「それはすごい。咸臨丸でアメリカに渡る。おめでとうございます」

「おめえも一緒だ」

「それは、誠でしょうか」

「あたりめえよ。俺は艦長、ジョン・マンおやじは副艦兼通弁役。

そしておめえは俺の片腕として。表向きは通弁役補佐官として乗っ

てもらおう」

じろつと嵐三郎を睨みつけたあと、

「分かったな、これは公儀御下命である」

と言つてにやりと笑った。

「分かりました。畏まって承りました」

答えたあと、ふうつと一息ついて嵐三郎が訊ねる、

「咸臨丸出航はいつ頃ですか」

眼をぎらつかせて麟太郎が答える。

「年明け早々に品川から出航だ」

「来年早々ですか。それはちと弱りました」

「おい、幕命だ。辞退は許されんぞ」

「はい、それはもう。実は服部家との縁談がまとまりまして」

「それは、目出度い。祝言はいつだ」

「はい、来春大安と決まりました」

「なんだ、そんなことか。よし、俺に任せろ。祝言を早めるように

服部儀左衛門殿に話をつけてやる」

「上手くできますでしょうか」

「簡単だ。大切な国事だぞ。俺たちは国家間の交渉で海を渡るのだ。

文句をつけられる事ではない」

「分かりました。何卒よしなに」

嵐三郎は頭を下げた。

嵐三郎にとつても祝言は早い方が良かった。愛しい千尋が自分の妻になる。なんと嬉しいことか。しかも咸臨丸に乗船して外国に行くとは、なんとすごい冒険であろうか。想像しただけで胸が熱くなる嵐三郎であった。

「麟太郎さん。もう一つお訊ねします。帰国はいつ頃ですか」

「ふふん。新妻が気になるか、無理もねえ。帰国は一年後だ」

「あと一つ、気になることが」

「なんだ、なんだ。言ってみろ」

「私は服部家の婿養子となります。従って旗本の身分を離れます。

幕臣ではなくなりますが」

「ははは。そんなことか。この俺は咸臨丸艦長として乗組員の選任を一任されている。なんの問題もあるもんか。要らぬ心配だ」

一気に酒を飲み干して続ける、

「ま、そうだな、先ずはこの件は黙ってりやいいさ。養子縁組の公儀申告は帰国してからでいいわな。おめえはこっそり目立たぬよう

に、内輪で祝言を挙げるといいさ」

勝海舟の助言を受けて、里見嵐三郎と服部千尋との祝言はこの年の秋、大安吉日に身内だけでひっそりと執り行われた。挙式を早めたのは勝海舟の口添えあつてのこと、儀左衛門も異論はなかった。

早速嵐三郎は、里見家当主の兄夫婦と二人の男子、家中の下働き者、それぞれに別れを告げ服部家に移っていった。

新婚初夜、

「今後とも仲よう頼む」

嵐三郎が千尋にそつと囁き、

「不束者ですが末永く……」

顔を朱に染めて千尋が答えた。声がか細く、最後は聞き取れなかった。

そうつとゆっくり床入りし、二人はその夜、目出度く夫婦の契りを交わしたのであった。

咸臨丸出航まで、夜毎、夜毎、嵐三郎は千尋を抱いた。愛おしくて堪らなかつたのだ。義父の儀左衛門に朝起きて顔を合わすのが恥ずかしかつたが、毎夜千尋を抱く行為はやめられなかつた。そうしてようやく新年を迎えた。

家伝投げ太刀

嵐三郎は新年の挨拶と渡米の報告ため、講武所男谷道場を訪れた。頭取室にて恩師男谷精一郎に面会。暫くお暇する旨を伝えたあと、

嵐三郎は、

「誠に僭越ではございますが、我が家に古来伝わる剣技に似た業を、恥ずかしながらご覧いただきたく存じます」

と切り出した。

「ほう、そなたの家に伝わる剣技とな。それは秘伝であろう。披露してもよいのか」

「はい、先生にだけは、一度見ていただきたく思っております」

これには訳があった。以前、勝麟太郎の家で酒を酌み交わしていたとき、彼がふと思い出して言ったこと、

「いつだったか従兄弟の男谷殿が、おめえの家に伝わる投げ太刀つてえ技を訊いてきたことがある。俺もそのことはおめえに一度訊いてみてえと思ってたんだが」

「ほっほう、男谷先生が。それはそれは」

嵐三郎が笑って答える。

「我が家に古くから伝わる剣技、投げ太刀。家祖が考案した業です。敵に大小の太刀を投げつける外道の業。とても武士道とはほど遠いものです」

「男谷殿は常に新しい剣技を考案する人だ。噂を聞いて参考にしたいのだろう。おめえも遣えるのかい、その投げ太刀つてえやつ」

「里見家に生まれし男子なら、一応習得してますが」

「ふうん、そうかい」

この話はこれで終わった。だが、嵐三郎の心に残ったのは、いつか大恩ある男谷先生に、家に伝わる投げ太刀の話をしようということであった。

嘗て、勝麟太郎の口利きで男谷道場の門を叩いた嵐三郎を、名人男谷精一郎は快く受け入れ門弟の一人に加えた。前記のように、嵐三郎には最初のうち、剣の才能は全く無いように見えた。しかし男谷は温かい目で根気よく嵐三郎に接した。やがて小太刀の技を教えられ、水を得た魚のように生き生きと稽古に励み、男谷一門の名に恥じない剣士となっていた。

そんな時、男谷はある方面から里見家伝の投げ太刀のことを耳にした。男谷は剣術研鑽のため、投げつけられる槍、放たれる弓矢、打

ち込まれる手裏剣、これらに対処する剣技や身のこなし方の工夫に日々勤しんでいた。

「実はな、嵐三郎、そなたの家に伝わる投げ太刀のことは、あるところから聞いていた。差支えなくば是非見たい」

「我が家祖が工夫した技ですが、武士道にあるまじき外道の業、と揶揄されることもあります。なれど、これにて家祖は武勲を立て、旗本の末席に加えられたと聞いております」

「嵐三郎、外道か武芸か、その技を見れば分かる。見せてもらおう」

「真剣を持って打つ技なれば、道場外にて」

「よし、分かった。庭内に用意しよう」

「家に伝わる秘伝ゆえ、本日だけお願いします」

「心得た。他言はせぬ、これきりだ」

男谷精一郎が凜とした声で答えた。

ここで里見家に伝わる投げ太刀について記しておこう。

時は戦国。関ヶ原合戦にて勝利を得た東軍の総大将徳川家康は、朝廷より征夷大將軍に叙任される。そのち將軍職と家督を三男秀忠に譲り、隠居して大御所となる。いよいよ豊臣家との最後の決戦、大阪夏の陣。徳川軍は大阪城を見渡せる茶臼山に本陣を構えた。合

戦も東軍が圧倒的優勢に進み、西軍総大将豊臣秀頼が立て籠もる大阪城も、落城寸前の時を迎えた。

深夜から張り出し闇を包み込んでいた霧が、陽が昇る頃ようやくやぐ晴れて、その山間が見え始めた時、家康本陣めがけて迫りくる一団があった。西軍豊臣方軍師真田幸村の騎馬軍団である。先陣を切る数頭の集団は本陣に近づくと、さあっと二手に分かれた。その空いた中央から二騎が進み出て、家康御座所めがけて突進してきた。真田軍団精鋭の内、弓の遣い手であろう。大将の甲冑を家康と見立て、一騎が大きく弓を振り絞り、矢を放とうとした。直後、いきなりのけ反り、身をよじって崩れ落ちた。

残る霧で見通しが利かず、急を突かれて狼狽する家康の側近衆。だが、その中にも、身を挺して盾とならんとする果敢な者もいた。

もう一騎は、落ち着き払って駒を前に進めた。狙いを定め、構えた弓をきりりと振り絞り矢を放とうとする。瞬間、またしても大きなけ反り、身をよじりながら崩れ落ちていった。

家康をして天下一の兵、と言わしめた真田幸村、その軍団の奇襲も未遂に終わった。一時は家康の眼前まで迫ったが、無念、討ち損じて敗走。多勢に無勢、幸村一党は戦塵に散った。

難攻不落と言われた大阪城もついに落城。西軍総大将豊臣秀頼と母淀の方は自刃。東軍大勝利にて戦は終わり、豊臣家は滅亡した。

家康は東軍に味方した各大名の論功行賞及び各武将の戦功、それらの恩賞には、長い時間を費やした。やがてそれも終えて、あとは個々の細かい武勲の褒章が始まった。

戦が終わり、敵味方の検死が行われ、それも全て終了した。本陣まで迫り、弓で家康を狙った真田軍団の騎馬武者二騎、その死因も解明された。一方の武者の首には大刀が突き刺さり、もう一人の武者の首は小刀で貫かれていた。

「あっぱれ。何者か」

検死官が叫んだ。

太刀を投げつけて家康の危機を救った者は、すぐに判明した。此度の戦で、負傷をおして参陣していた家康近習の家来であった。主が怪我で戦場の足手まといにならぬように、世話役として付き従っていたのである。

この小者の取った行為に側近たちから異論が噴き出た。

「急場を救った功はあれど、一面と向かい合っただけの太刀打ちにあらず。

武士の魂たる太刀、大小とも投げつけるとはもってのほか。さほど

の褒章にはあたわず」

こう言って注文をつけた。

またある側近は、

「いかにも左様。大御所様の弓矢の盾になるのであれば、生死に拘らず大手柄であろうが、これは論外」

「左様、左様。もし大小外れしときは、丸腰、武士の面子は無い」

「御意。武士道にもとる行い。徳川家の御名を汚すものなり」

口々にこう異論を唱えた。

側近たちの意見をじっと聞いていた家康、後方に控える家臣に声をかけた。

「又右衛門」

呼ばれた武士は柳生又右衛門宗矩。父は家康の兵法指南役柳生石舟斎。傍らで側近たちの議論を聞いていた。

「その方はいかに思うぞ」

「恐れながら申し上げます。馬上二騎、共に大小二刀にて仕留めたるは尋常の技にあらず。余程の手練れかと思われませう。愚考ながら、それがしは武人の業と心得まする」

柳生又右衛門だけが手柄であると称えた。

「あい分かった。その者を召し出せ」

家康の居城、駿府城庭内広場、召し出されて平伏する男の名は里見多二郎といった。

「多二郎と申すか。その方に訊ねる。両刀を投げつけるのはいかがなものか。申してみよ」

畏まって平伏していた武士が答えた。

「恐れながら申し上げます。それがし軽輩の身なれば、干戈を交える技、持ち合わせ候らわず。主を守護仕るに、できるは太刀を投げつけることのみ候」

聞いた家康は、にやりと笑って。

「それで良い。その方に命ずる。向後は投げ太刀をもって末代まで仕えよ」

徳川直参旗本としての身分が約束された瞬間であった。里見多二郎は歓喜に身を震わし、地にひれ伏した。茶臼山本陣での手柄一番は、咄嗟に身を投じて矢の盾になった者、そして、駆けつけて家康を守った者たちがそれに準じ、それぞれ多大な恩賞を与えられた。多二郎は旗本末席に取り立てとなったが、主人には僅かな褒美しか与えられなかった。

里見家はこのち剣の道は歩まず、家伝として、多二郎が考案した投げ太刀を後世まで伝えたのである。だがしかし、槍や手裏剣とは違い、武士の魂である大刀小刀をそれぞれの場に応じて投げつける必殺技は、武士道から外れると蔑まれることもあり、みだりに他に伝えることは許されなかった。

幕府講武所男谷道場の庭内。余人を交えず、男谷と嵐三郎師弟が立っていた。庭内にしつらえた人体を横した藁人形。他にも数体用意されている。嵐三郎はそこから大きく離れた場所に立ち、腰に差した大刀と脇差に手をかけ、師に声をかけた。

「始めます」

嵐三郎は叫んで真剣二刀の内、脇差を引き抜いた。投げ太刀。まずは遠距離の標的には小刀、脇差を遣う。身を低くして、距離を測り、柄を握ってひようと投げつけた。放たれた剣は少し弧を描いて標的藁人形の頭部に突き刺さった。次は近くの距離。引き抜かれた大刀が投げられ、藁人形の首が吹っ飛んだ。首を刎ねる狙い打ち、胸を貫く直線打ち、それぞれ距離によって大小遣い分け、握る柄の部位も変化する。真っ直ぐ投げ、回転投げ、嵐三郎の手から繰り返し太刀が放たれた。

藁人形の標的は、ものの見事に首は刎ねられ、胸には太刀が突き刺さり、投げつける嵐三郎の眼光は鋭く、身のこなしは敏捷であった。

また、対峙した敵に小走りに近づき、太刀を投げつけ、角度を変えて横っ飛び。そんな体術も披露した。

剣技披露の場に立ち会った男谷精一郎は、身の引き締まる思いであった。時に戦慄が走るほど衝撃も受けた。

……これも武術か、恐ろしい……。

男谷には、この剣技は、武芸ではあるが、暗殺剣のように思えた。数年後。男谷精一郎は、これまでの直心影流体技に、さらに改良を加えた。対峙した際、咄嗟に相手が太刀を投げつける場面を想定し、対処する新技を完成させたのであった。

咸臨丸

咸臨丸出航の日が三日後に迫った夜。

「千尋、家のこと、義父上のこと、くれぐれも頼むぞ」

嵐三郎が話すと、

「家のことは大丈夫です。あなた様の無事のお帰りを祈っております」

す」

千尋が答えた。

「俺のことなら案ずるな。元気に行って参る」

「はい」

答える千尋の眼に光るものがあつた。

残された少ない日々、精いっぱい夫婦の名残を惜しんだのち、いよいよ出航の日がやってきた。

遣米使節団の内、正使一行は米国軍艦ポーハタン号に乗船。顔ぶれは正使・新見正興、副使・村垣範正、監察に数年後、海舟の論敵となる小栗上野介忠順、総勢七十七名。

そして嵐三郎が乗る咸臨丸。その派米目的は、軍艦ポーハタン号の随伴艦としての使命、また、幕府海軍の初練習航海も兼ねていた。

主だった乗船員は軍艦奉行役・木村摂津守喜毅、艦長・勝海舟、副艦・中浜万次郎、奉行従者・福沢諭吉など、総勢九十名。

安政七年一月（のち改元して万延元年）遣米使節団は、二隻の軍艦で品川港から出航したのであつた。

太平洋を米国に向かって突き進む咸臨丸、その航海は順風満帆とはいかなかった。荒天が続き、厳しく甲板に叩きつける風雨、大き

くうねる海。艦長の勝海舟はひどい船酔いで、艦長室に籠ったまま、船上には現れない有様。他の日本人乗組員も同様に、船酔いと疲労で行動不能に陥った。

嵐三郎は様子が気になり、艦長室に籠る海舟を見舞った。海舟は寝台にぐったり横たわっていた。嵐三郎の方に力無く目をやり、

「嵐三郎、おめえも顔色が悪いぞ。船はアメリカの連中とジョン・マンおやじに任せて、おめえも休め。俺はここから一步も動かぬ」

海舟を見舞ったあと、船室に戻った嵐三郎にも、ひどい船酔いが襲った。頭痛と寒気、そして吐き気、

「こりゃいかん。とてもかなわぬ」

嵐三郎もふらふらになり、立ってもいられず、そのまま床に倒れ込んだ。

そのような理由で航海中の操業は、漁師上がりで捕鯨船船員の経験がある中浜万次郎と、航海指導官として上船していた米国海軍ジョン・ブルック大尉指揮官、そして部下の米国水兵たちで行われた。

咸臨丸は、艦の各所がひどく破損した状態であったが、ようやく目的地アメリカ・サンフランシスコ港に着岸した。往路四十日に亘る疲労困憊の船旅であった。

上陸した咸臨丸乗組員一行は、大歓迎を受けホテルに宿泊。あとは米国軍艦ポーハタン号に乗船してやってくる遣米使節団一行を待つのみであった。だが、待てども、待てども一行は到着しなかった。

「麟太郎さん、大しけで難破、なんてことはないでしょうね」

嵐三郎が海舟に話しかけた。

ようやく体調が戻ってきた海舟が、

「馬鹿を申すな、咸臨丸より数倍大きい、堅牢な軍艦だぞ。遭難してたまるかよ」

「確かに。そうは言っても、もうひと月になります。心配です」

「連中、どこかに寄港してるんだろうよ。呑気なもんさ」

勝海舟が予想した通りであった。軍艦ポーハタン号は荒天続きで、予想を超えた燃料を使い果たし、石炭の補給のため、途中ハワイに寄港したのである。補給を終えて出航前、一行はハワイ国王カメハメハ四世に拝謁。諸事情で、軍艦ポーハタン号のサンフランシスコ到着は、予定よりも一カ月も遅れてしまった。

咸臨丸上船団と正使団一行はようやく合流し、日本人乗組員全員が晴れて当地に勢揃いした。揃ったところで、サンフランシスコ市長主催の歓迎式が盛大に行われた。

遣米使節団の内、正使団一行はこののち、他の軍艦に乗り換えてパナマに向かった。その後、初めて乗る汽車でアメリカ首都ワシントンに到着。ワシントンではK国務長官を表敬訪問。そしていよいよ、B大統領に謁見。批准書を交換して無事任務を終えた。

その後、鉄道で各地移動しながらニューヨークに着き、三十日間滞在する。なんと、ブロードウェイでのパレードでは、市民五十万人が集まる大歓迎を受けた。

使節団一行は滞米中、文明、文化の違いをまざまざと見せつけられながら、ようやく軍艦ナイヤガラ号で帰国の途に就いた。帰路は北大西洋横断、ポルトガル経由、喜望峰を回り、インド洋に出る。オランダ、ジャカルタ、香港経由、地球をぐるりと一周して、品川に帰港したのであった。

余談ではあるが、日本人初の地球を一周した者たちに、延享元年、津太夫他三名がいる。が、それらは嵐に遭って漂流し、はからずも救出され、地球一周したのである。公式としては、遣米使節団が最初の出来事であった。

一方、勝海舟、嵐三郎たち咸臨丸乗船員は、正使団一行と別れて帰国の準備をしていた。咸臨丸の任務はこれで終わりなのである。

あくまでも正使団に随行しての練習航海なのだ。だが、思いのほか咸臨丸の損傷がひどかった。修理に数カ月もかかるという。

「じゃあない。いい機会だ、いろいろ見聞しようかい」

いつもの海舟に戻って、元気のいい声を響かせた。

嵐三郎は中浜万次郎、福澤諭吉などと街に出て名所見物を楽しんだ。一般市民の家庭を訪問したときは、その家族と一緒に初めて写真を撮ってもらい、楽しい時間を過ごした。

中浜万次郎はウェブスター英中辞典を購入した。本国に持ち帰り英和辞典を作成するのだと言う。

「嵐三郎よ、これがあれば、これからの通商交渉に大いに役に立つぞ」

「はい。微力ながら、私もお手伝いいたします」

アメリカ西海岸の明るい陽射しを浴びて、万次郎も嵐三郎も、晴れ晴れとした笑顔になっていた。

咸臨丸修復も成り、いよいよ帰国の準備に取りかかる頃、嵐三郎は予期せぬ病魔に襲われた。嵐三郎を含む乗組員数名が、高熱を発し、意識朦朧となり、苦しみながら床に臥せってしまった。

明くる日も、明くる日も、高熱で起き上がれず、中には生死を彷徨

徨うほどの重篤な者もいた。公立病院に搬送されたあと、全員隔離病棟に移された。病因はサンフランシスコを中心に、アメリカ西海岸に広がりつつある細菌性流行病であると、アメリカの医師団が告げた。そしてとうとう船員の一人が亡くなった。

帰国が近づき、勝海舟は重大な決意を迫られていた。

「嵐三郎よ、病に臥している者たちを残して国に帰ることにした。許せ」

「麟太郎さん、分かっています。この病身では帰れません。皆に迷惑どころか、病気がうつっては命にかかわります」

「辛抱せい、必ず迎えにくるか、或いは米国船で帰国できるように、俺がしてやる。この俺を信じろ」

「はい、勿論です。先に帰られたら、私の家族に良しなお伝えください」

「あい分かった、早く良くなれ」

「はい、必ず治します。しばしの別れです」

三日後、罹患した嵐三郎たち船員を残して、咸臨丸はサンフランシスコ港を離れ、帰国の途に就いた。

レフティ・ジョーンズ

嵐三郎にとって、苦難の日々が続いた。微熱が続き、少しずつ咳き込むようになり、自分でも身体が痩せ細るのが見て取れた。

嵐三郎以外の残った乗組員たちは、数カ月してすっかり回復し、目出度く退院。翌年まで滞在した後、米国海軍軍艦に乗せられ、日本に無事帰還したのであった。

一人取り残された嵐三郎は、いまだ隔離病棟の床に臥せていた。長いこと咳に悩まされ、快復のめどが立たないもどかしさで意気消沈していた。

この咳、肺を冒されたか、労咳であろうか、ならば不治の病。内心、死を覚悟せねばならぬと、嵐三郎は考え始めていた。脳裏に浮かぶのは、愛しき千尋の悲しげな顔。

……必ず無事で帰ると、あれほど約束したのに。無念。千尋すまぬ。許せ……。

絶望感が身に押しよせて、苦悩の日々が続いた。

医師からは、肺に細菌が入ったようだ知らされ、我が身の不運を呪った。来る日も来る日も病との闘い、痩せ細っていく身体、ここにきて嵐三郎は覚悟を決めた。

「天命なれば、いたし方なし」

声に出して叫んだ。

ある夜、嵐三郎は自決を覚悟し、日本から着てきた和服に着替え、武士の魂である太刀と脇差を持って外に出ようとした。

その時、病室の扉を叩く音がした。ゆつくりと扉が開き、見慣れぬ男が、ぬうっと入ってきた。太刀を持つ嵐三郎に一瞬ぎよつとしたようだが、

「ハロー、こんばんは。初めまして」

ぽかんとしている嵐三郎に、男は笑顔を作って、

「私はレフティ・ジョーンズと申します。里見嵐三郎さんですね」

と、続けて話しかけた。

言われて、はっと我に返った嵐三郎は、慌てて両刀をベッドに置いて、

「これは、失礼しました」

と、男に答えた。

男はどう見ても嵐三郎と同年配のようだ。にっこり笑う顔がやけに人懐っこく、なんとなく嵐三郎に雰囲気似ている。

「里見さん、体調いかがですか」

「はい、残念ですが、まだまだ具合は良くないと、医者にも言われ

ています」

「そうですか、それはいけませんね。ところで、私は日本人の、着物姿を見るのは初めてです。侍姿、格好いいですね」

この男、見舞いなのか、さっぱり分からず、

「あとう、ご用件は」

嵐三郎が問いかけると、

「オー、イエス。私は、雇い主であるフランク・A上院議員から、依頼されてきました」

「上院議員ですか」

「はい、政治家です。それも大物政治家。フランク・A上院議員とその夫人から頼まれました」

レフティ・ジョーンズと名乗った人物は、ゆっくりと語り始めた。

アメリカ西海岸を地盤とするフランク・A上院議員は、里見という日本国使節団の団員が一人取り残され、現在闘病中との噂を聞き、救いの手を差し伸べることにした。

事の発端はジェーン夫人だった。東洋文化、中でも美術品、書画、陶磁器、民族衣装、などに惹かれるジェーン夫人は、特に日本から輸出される伊万里の焼物が好きだった。アメリカには無いその美し

い陶磁器に憧れてもいた。

ある日、上院議員夫妻主催の慈善パーティーで、遣米使節団から一人外れて、アメリカの病院に日本人がいる、という会話を耳にした。夫人はすぐに事実なのか調査にかかった。それが事実と判明すると、

「なんて、気の毒なの」

と言ってひどく同情した。

そこで、夫のフランクに、近頃ヨーロッパで開発された細菌に効く新薬を、なんとか取り寄せるように頼んだ。そしてその新薬を治療に当て、日本人の命を救ってあげてと懇願した。

フランク・A上院議員は、愛する夫人の頼みを聞き入れ、早速新薬を購入する手配をした。やがて、新薬が上院議員のもとに届けられ、レフティ・ジョーンズが使者として病院に遣わされた。そして病院の院長及び関係医師に、新薬を投与するよう要請したのであった。

上院議員が日本人闘病中の噂を聞き、救いの手を差し伸べることとなったいきさつを、レフティ・ジョーンズは楽しげに話すのだった。

「新薬ですか。私に」

「はい、来週から治療に入ります。きっと良くなりますよ」

屈託のない笑顔を満面に浮かべて、レフティ・ジョーンズは語り続けた。

新薬による治療が開始され、数週間が過ぎた。やがて、立ちこめた暗雲が晴れるように、嵐三郎は咳も止まり、微熱も正常に戻り、少しずつ快復に向かっていった。食欲も出て、歩行もできるようになり、徐々に体力もついてきた。数カ月も経つと見違えるように元気な姿に戻ったのである。

しよっちゆう見舞いに訪れるレフティ・ジョーンズという青年は、フランク・A上院議員の使用人ではなく、雇われた私立探偵であると言った。それとは別の職業、新聞記者、政治ジャーナリスト、そんな顔も持っていると言明した。が、そのときの嵐三郎には、ちんぷんかんぷんのもので、ただ聞き流すだけであった。だが時間が経つにつれて、少しずつ分かってきた。

レフティの話から察すると、いずれアメリカ大統領を目指す大物政治家フランク・A上院議員には、政敵が大勢いる。選挙を有利に戦い抜くとき、必要なのはあらゆる情報である。レフティ・ジョー

ンズは、若年ながらやり手の私設情報官として上院議員に雇われている。民衆の国政への不満、政敵が陰で操る闇組織の動向、選挙対抗馬の醜聞、ありとあらゆる情報を集めて、密かに上院議員に伝えるのが役目である。

ふと、嵐三郎が気づいた。彼はどうやら隻眼である。簡単には気づかないが、右眼が不自由のようだ。そんなことはまったく気にせず、嵐三郎はレフティと何となく馬が合うように感じ始めていた。ひよっとして似た者同士かもしれない。嵐三郎はそう思った。そうしていつしか二人は、すっかり打ち解けて、意気投合、何でも語り合える仲となっていた。

元気を取り戻した嵐三郎は、目出度く退院の日を迎えた。日本人使節団の一員であるだけに、病院での扱いは丁重であった。病院長はじめ医師団、病院関係者にそれぞれ謝意を述べて外に出ると、レフティが迎えにきていた。

「退院おめでとう、嵐三郎。おお、とても洋服が似合ってるよ」
レフティが差し入れてくれたアメリカの服を、嵐三郎は着ていたのだ。

恥ずかしそうにもじもじする嵐三郎に、

「間違えるように元気になった。男前だぜ、嵐三郎」

すっかり仲良しの友人に話す気さくな口調である。

「これから上院議員邸に向かう。ご夫妻がお待ちかねだ」

「レフティ、お世話になりました。御礼の申し上げようもありません」

「オーケー、大丈夫。案内しよう」

そして嵐三郎の手荷物をじろじろ見ながら、ある物を確認して、

「そうそう、嵐三郎、日本刀を持参するように」

「え、刀をですか」

「そう、刀。フランク・A上院議員は、日本の侍、武士道に大変興味をお持ちだ。是非、侍のこと、刀のことを聞かせてほしい。特に刀の使い方など披露してくれないか」

「そうですか、分かりました。両刀を持参します」

春の爽やかな陽ざしを浴びながら、二人は病院を後にした。こうして嵐三郎は、レフティに同行して、馬車に乗ったり、自動車に乗ったり、鉄道を汽車で移動したり、初めての貴重な体験をすることになる。

アメリカ・ロサンゼルスは大都市である。市内の富裕層が住む一

角、ここにフランク・A上院議員は豪邸を構えている。レフティに連れられて議員邸に着いた嵐三郎は、議員夫妻の出迎えを受けた。緊張で身が引き締まる思いながら、命を救ってくれた恩人夫妻に、心より丁重な御礼の言葉を述べた。

議員夫妻は嵐三郎にとっても優しく、親切であった。フランク・A上院議員は声が大きく、豪快そうで、嵐三郎に気さくに話しかけてくれる。

ジェーン夫人は特に優しく、嵐三郎の身体を気遣いながら、東洋文化のこと、日本文化、風習のことなど、いろいろ質問し、とても楽しそうだった。

嵐三郎はフランク・A議員の要望で、侍の心得、武士道精神など、分かっている知識で一生懸命説明した。議員は真面目に聞き入っていた。そして話が武士の刀に移ると、男だけに、嵐三郎が持参した日本刀に興味を示した。

「里見さん、武士の剣法を是非見せてくれないか」
フランク・A上院議員が声高にいった。

案の定、来たな、と思い、同席しているレフティをちらりと見やると、レフティはにやりと笑い見える眼で目配せした。

「はい、承知しました」

快活に答えてから、嵐三郎は太刀を手に持ち、レフティに促されて広い応接間に身を移した。そして深く一礼したあと、太刀をすらりと引き抜き、鞘を傍らに置いた。

日本刀による基本の構え、上段、正眼、下段、眼光鋭く前方を見据え、鍛練を重ねた直心影流の型を披露した。

異国の地で、異国人の面前で、慣れぬ洋服を着て、嘗ては苦手であった剣術を披露する羽目になるとは、なんとも皮肉な巡り合わせであった。

……千尋、生きているぞ。この姿をなんと見る……。

嵐三郎は千尋が笑い出す姿を思い浮かべた。

議員は自分でも太刀を振ってみたいと言う。嵐三郎は快く議員に太刀を手渡し、上段から振り下ろす動作を教えた。

「おお、想像以上に重い、すごい。素晴らしい」

議員は叫んだ。すっかり興奮していた。そして、構えたり、振りかざして打ち下ろしたり、その都度質問を繰り返した。

そこで嵐三郎は考えた。この国にいる間は、どうやら太刀を遣うこともなからう。帰国の船上では勿論身に付けぬ。祖国に帰れば代

わりの太刀はいつでも手に入る。大恩を受けた身なれば、この御方に、せめてもの感謝を込めて謹呈しようかと決心した。

「卒爾ながら、命を救ってくれた御礼に、この太刀を進呈します。今の私にただ一つできることは、これしかありません。感謝の気持ちを受け取ってください」

びっくりして目を丸くする上院議員に、

「無銘ながら、我が家に伝わる日本刀です」

そう言って深々と頭を下げた。

思いがけない太刀の贈りものに、フランク・A上院議員は驚きの声を上げ、そして大いに喜んだのであった。

こののち、上院議員の計らいで、嵐三郎の今後の身の振り方、相談事などは、全てレフティが世話をする、ということが決まった。実はレフティもジェーン夫人と同じく、東洋文化に興味があり、日本のことも知りたがっていた。そんなわけで上手い具合にことは運んだ。

議員夫妻から贈られた、新しい洋服に着替えた嵐三郎。髪もぼつさり切り整えて、すっかり西洋人のいで立ちとなった。議員邸を辞するとき、議員から、

「アメリカにいる間は、みんなが呼び易いようにランジーと名乗りなさい」

と、渾名まで付けられてしまった。

嵐三郎ことランジーは、レフティの仕事の都合で暫くロサンゼルスに住むことになった。

レフティは、倉庫を借りて事務所代わりにしていた。雑然とした空間の半分は、画布、絵の具、絵筆などの画材が置かれている。どうやら彼は西洋画を趣味としているようだ。作業場のもう半分、その一角を衝立で囲って、部屋代わりに使わせてもらうことにした。居候の身となり、恐縮するばかりなのだが、レフティはいたって気楽で、何も気にせず、かえって話し相手ができて毎日が楽しくなった、と笑って言った。人情が身に沁みる嵐三郎であった。

同居するようになって、レフティ・ジョーンズなる人物がいろいろ分かってきた。

彼は、父がアイルランド人、母がヨーロッパの人。母方の国の、ある小さな島でレフティは生まれた。幼くして両親が離婚、レフティは父に引き取られアイルランドで少年期を過ごす。そして父と共に、新大陸アメリカに移民として渡ってきた。間もなく父は病死。

一人になったレフティは、いろいろな職業を転々とする。苦労を重ねながら、独学で物書きを覚え、ようやく新聞記者になる。

「記者と言えば聞こえはいいが、有ること無いこと、でっち上げる新聞ゴロさ」

と、本人は自虐的に説明した。

こんなことも彼の口から出た。

「レフティは渾名さ」

彼が言うには、生まれ故郷の小さな島の名前が、レフティ・アイランド、そこからレフティと呼ばれるようになった。が、本当のところは違うと言う。

彼の本名は、パット・ジョーンズ。幼少時、不運にも右眼を失明。さりげない日常でも、喜怒哀楽のときでも、左眼だけきらりと光るため、意地悪い連中から、レフティ即ち左側、と蔑称のような意味を込めて渾名を付けられた。それが真相であると彼は言った。

「ところがな、ランジー、俺はレフティと呼ばれることが、結構気に入っているんだ」

「そうか、私はランジーだし、それも悪くはない」

二人はレフティ、ランジーと呼び合う仲になっていた。

時が流れた。

嵐三郎を迎えにくるはずの日本船も音沙汰なし。アメリカ政府関係からはなんの連絡もない。

……無理もない、遣米使節団員といっても、本当は随伴する別動隊員なのだから。たった一人、それもちっぽけな日本人に迎えが来るはずもない、俺は諦めるしかないのか、いや、諦めるわけにはいかぬ……。

祖国に残した千尋を思うと、悲しみに胸が張り裂けそうになる。必ず帰れる、いや、帰る。そう自分に言い聞かせる日々であった。自問自答を繰り返しては、虚しく、暗く、希望が消え、このまま異国の地で朽ち果てるのかと、絶望感だけが残った。

鬱々とふさぎ込んでいる嵐三郎に、レフティが、

「おい、ランジー、旅行に行くぞ」

と呼びかけた。

レフティは、上院議員から命じられた任務でニューヨークに出向くことになった。その旅行に嵐三郎を同行させることにした。良い気分転換になると思ったのだ。

「旅行、どこへ」

「ニューヨーク、大都市だ」

レフティが陽気に答えた。

……旅か、それも悪くない。せつかくのレフティの誘いだ、断るのも悪いしな……。

嵐三郎は行くことにした。

嵐三郎にとって、その旅は人生観が変わるほどの衝撃となった。移動の過程で乗る列車、自動車は無論のこと、他の見るもの聞くもの全て斬新で、驚愕、仰天の連続であった。こんなに文化の進みが違うのかと、祖国との大きな差を感じた。つくづく日本は英米に比べて遅れていると、痛感せざるを得なかった。

ニューヨーク市、ブロードウェイに立つて、

「ここが遣米使節団を大歓迎した大通りか。たまげたものだ」

と、呟いた。

数週間滞在後、二人は何事もなくロサンゼルスに戻った。

ところでレフティの仕事だが、一体なんの任務なのか、どこで、どんなことをしているのか、嵐三郎にはさっぱり分らなかった。

レフティは嵐三郎に、これといった特別なことはさせなかった。嵐三郎にできる簡単な仕事とは、言われるとおりに指定の場所に立ち、

人の気配があれば手を挙げて知らせる、或いは席に座って世間話をするだけとか、たまに匣の道具的役割もあり、まるで諜報員のようなこともする。部屋に籠って書類の整理も手伝うが、重要書類は渡されない。するのは雑用ばかり。レフティの任務は、どう見ても国事に関わる大袈裟なものではない。国家諜報機関の情報官でもなさそうだ。

レフティとフランク・A上院議員との関係は、議員がまだ政治家に転身する以前からの知己であるらしい。

「俺は議員の部下ではない。あくまでも古い友人として、議員の政治活動に手を貸しているだけだ」

レフティは嵐三郎にきっぱり言った。

立場上は主従ではなく、自由に動き回って、ある種の情報を収集しては、上院議員の専門情報部に報告しているようだ。

……我が国にも同じ輩がいる。幕府の回し者、公儀の犬、そう陰口を叩かれる。だがレフティはちよつと違う、公人ではない。それだから出会ったとき、私立探偵みたいなものと言ったのだろうか……。

大雑把ながらレフティの任務の輪郭が見えてきた。

レフティは実に多才な男だ。

本来、文章を書く仕事をしているためか、博学であった。中でも西洋美術に造詣が深く、自身も絵を描く。また近頃では東洋文化に興味があり、日本の文学、絵画などについて、折に触れて嵐三郎に質問してくる。

嵐三郎が感動したことに、レフティの音楽がある。彼はフィドルという弦楽器を巧みに操り、音楽を演奏した。もの悲しく心に響く美しい旋律に、嵐三郎は、

「教えてくれ、これはなんとという音楽なんだ」

「俺の故郷、アイルランドの民謡さ」

それを聞いて、彼もまた望郷の念を抱いているのが感じ取れた。

嵐三郎は心を奪われ聴き入った。レフティが奏でるフィドルの音色が、異国の地で一人寂しく日々を過ごす嵐三郎を慰めるのであった。

ある夜、レフティと街の中心部に所用で出かけ、用事を済ませての帰路。暗い裏通りを歩いていると、レフティが囁いた。

「ランジー、後ろを振り向くな」

「え」

「つけられてる、俺に何かあったら、真っ直ぐ逃げろ。奴らの狙いは俺だ」

どうやら、誰かに後をつけられている。嵐三郎も気配を察知した。

「三人だな」

レフティが呟く。

そのとき、屈強そうな男たちがいきなり襲ってきた。嵐三郎は突き飛ばされ道路の端まで吹っ飛んだ。レフティも殴られ、倒れたが、暴漢の蹴りを横に転がりながらかわすと、

「ランジー、逃げろ」

と叫んで、だっと走り出した。

暴漢三人は、嵐三郎には目もくれずレフティを追いかけた。言ったりおどろいちはレフティ。嵐三郎はよろけながら立ち上がり、ふうっと大きく息をついたあと、レフティが逃げ去った方向に走り出した。

少し走った先の路地の暗がりには、レフティと男三人が立っていた。月明かりの下、男三人はレフティの構えに間合いをつめていく。男の一人が鉄拳で襲いかかるも、レフティは身を捻ってかわし、相手の横っ腹に回し蹴りを食らわせた。男が苦悶の声を漏らし膝を突いた。レフティは拳法、格闘技さえも身に付けていたのだ。

追いつき、それを目撃した嵐三郎は、ふと、足元に転がっている

短い円筒の鉄棒を目にし、それを拾い上げた。

「やめろ」

嵐三郎が叫んで、男三人とレフティの間にすばやく割って入り、鉄棒を振りかざした。

薄明りの中、男の一人がにやっと笑ったように見えた。

「ジャップ」

男が吐き捨てるように叫び、嵐三郎に殴りかかった。二つほど鈍い音。ううつ、という呻き声が同時にした。男が白目をむいて倒れ込んだ。右肩と横首の急所を打たれ、男は気を失っていた。それを見た横の男が、

「この野郎」

逆上してナイフを取り出した。

「殺すな」

蹴られた男が立ち上がり、レフティに身構えながら叫んだ。

言われた男は、ナイフを振り上げながら嵐三郎に切りつけようとした。その瞬間、またしても鈍い二音。嵐三郎が得たりや応と、鉄棒を男の右腕と喉元に振り下ろしたのであった。声も発せず、二人目の男も地面に突っ伏した。腕に覚えのある直心影流小太刀、後の

先、こんな時に役に立つとは。嵐三郎は残った男を睨みつけた。

「仲間を置いて逃げな」

レフティが男に声をかけた。

男は少しずつ後ろに下がり、だっと踵を返して走り去った。

「おい、ランジー、こいつら、死んでないよな」

レフティが嵐三郎に声をかけた。

「大丈夫、私は人を殺めたりはしない」

と嵐三郎が答えた。

「良かった。こいつらも俺を脅すだけで、殺すつもりで襲ったんじゃないのさ」

「何者ですか」

「上院議員の政敵、そこからの回し者。俺が集めた政敵の醜聞の口封じさ」

その場から足早に引き返しながら、レフティが、

「それにしても、日本の侍ってのは、棒を持つと強いな。今度この俺にも剣法教えてくれ。アメリカ侍、悪くない」

と、軽口を叩いた。それには答えず、嵐三郎は、

……危ない仕事を引き受けるレフティ、いい度胸だ。不思議な男

もいるものだ……。

そう思うのであった。

政変

そんな事件のあと数年が経った。

フランク・A上院議員からの伝言が、レフティによってもたらされた。

日本に政変が起きた。征夷大將軍徳川慶喜が、天皇に大政奉還して退位。抵抗する幕府軍は朝廷方官軍に敗れ、三百年続いた徳川幕府は消滅した。明治天皇の下、世は明治政府が統治し、江戸は東京と名を変えた。武士は一般市民となり、すっかり様変わりしているとのこと。

嵐三郎は呆然と説明を聞いていた。

……幕府が倒れた。江戸が無くなった……。

嵐三郎は、千尋は勿論、他の身内たちのことも気がかりであった。

レフティの話の中に、

「咸臨丸艦長だった勝海舟が、幕府の代表として、官軍の総大將西郷という男と会談。江戸城を無血開城して、江戸市民を救ったと大

騒ぎだったそうだ」

「え、勝海舟、江戸城無血開城」

嵐三郎は思わず声を出した。

……そうだったのか、幕府は敗れたのか。麟太郎さんは敗軍の将として苦心されたか。無事であろうか。麟太郎さんがこんな事情なら、私の帰国などもはや絶望であろうな……。

嵐三郎は我が身の不運を呪うばかりであった。

それからまた歳月が流れた。

レフティの仕事場で暮らす失意の嵐三郎に、追い打ちをかけるように虚しい連絡が入った。

フランク・A上院議員からであった。情報局を使って明治政府に嵐三郎の所在を通知して、連絡待ちであったが、ようやくその回答が届いたのだ。

朝敵、旧幕府旗本の身分の者、米国残留の件は、一切当政府の関知するところに非ず。

そういう冷淡な返事であった。伝え聞いた嵐三郎は、

「分かりました。もう結構です。いろいろありがとうございました」

悲願の帰国は断念、この地で果てる覚悟を決めねば。そう嵐三郎

は考えた。

「気を落とすな、ランジー。日本政府が駄目でも、上院議員がアメリカ船できっと帰れるように計らってくれる。それまで辛抱するんだ」

レフティが失意の嵐三郎を懸命に励ますのだった。

虚しい日々が流れる中、アメリカの政局が動いた。

フランク・A上院議員が再び選挙に勝利し、なんと合衆国副大統領に選任されたのだ。

ロサンゼルスにいるレフティ、嵐三郎も共に驚き、そして喜んだ。

「これからもっと忙しくなりそうだ」

レフティが声を張り上げた。

「すごい出来事ですね。おめでとうございます」

嵐三郎が答えた。

これだけではなかった。このあと、アメリカの政治に異変が勃発。

アメリカ合衆国、B大統領が暗殺されたのだ。

大統領制の法に従い、急遽、フランク・A副大統領が昇格し、合

衆国大統領に就任した。

アメリカの政治がどんどん変わる。あれよあれよという間に、大

きな出来事が嵐三郎の身にも降りかかってきた。日本でもアメリカでも激動の時代なのだ。嵐三郎はそう痛感した。

数カ月経ち、一年が過ぎ、また一年、慌ただしい世間の喧騒の中、レフティと嵐三郎は相変わらず、何事もなく雑事をこなしていた。

ある日、

「おい、ランジー、すごいビッグニュースだ」

レフティが大きな声で入ってきた。

「ほう、なんででしょう」

嵐三郎が訊ねた

「大統領が南部に遊説に行くことになった。そこで俺に南部のあらゆる情報を集めるようにと、任務が与えられた」

「アメリカ南部に行くのですね。我々の拠点はどこの街ですか」

「先ずは軍港のあるニューオリンズだ。それに」

そう言いながらレフティはポケットから紙片を取り出した。何か書類の写しのようなものだ。

「驚くな、ランジー、吉報だ」

にこにこしながらレフティが紙片をひらひら振りかざした。それは公文書の写しであった。内容は大統領府から国務省への通達文の

ようだ。それを卓上に置いて二人は目を通した。その文面には、

アメリカ国ルイジアナ州ニューオリズ市にて開催される万国博覧会、それに日本国明治政府が正式に参加を表明する。日本の伝統工芸品を出品し、会場内に設営する日本館にて展示する。

と、書かれていた。

写し書の次頁をめくって、目を通したあと、レフティが、

「万国博覧会日本代表団の中に、こんな人物の名があつたぞ」

レフティから写し文書を受け取り、英文を一文字、一文字ゆつくりたどりながら嵐三郎も目を通す。その頁には、日本代表団一行の名前が列記されていた。

日本代表団団長ジュウダユウ・ハットリ、通訳補佐ギザエモン・ハットリ……。

「あ、これは」

嵐三郎が声を上げた。

「義父上だ」

その視線の先に、まぎれもなく服部儀左衛門の名が記されてあつた。

「やっぱりそうか。それはすごい。本当だな」

「はい、義父です。この名前は間違いありません」

「やったな、ランジー、万国博覧会は来年開催だぞ」

「ギザエモン・ハットリ、これが義父かどうかは、これだけではまだ分かりません、人違いかも知れない。でもこの名は義父と同じです」

「おい、ランジー、人違いでも日本からの船だ。帰国の際、乗船できるように大統領が手配して下さい。もう心配ない」

嵐三郎の肩を叩いてレフティが続ける。

「一年経てばお父さんに会えるぞ、良かったな」

「誠なら、辛抱の甲斐がありました」

「大丈夫だ、ランジー、国に帰れるな、良かった。奥さんにも会えるぞ」

嵐三郎は感極まって、答えられなくなっていた。その目に涙が溢れ出た。アメリカに来て初めての歓喜の涙であった。

「共に行こう、ニューオリンズへ」

レフティがワインボトルとグラスを持って、

「乾杯だ」

陽気な声で歌い、踊りだした。

涙を拭いながら嵐三郎も叫んだ。

「いざ行かん、ニューオリンズへ」

ニューオリンズ

ニューオリンズは、当時アメリカ合衆国ルイジアナ州の州都であった。ルイジアナは、元はフランス領である。その後、悪名高いパリ条約でスペイン領となる。やがて皇帝ナポレオンが、力づくでフランスに取り戻す。しかし財政が逼迫し、一八〇三年、アメリカに売却した歴史がある。

メキシコ湾に近く、ミシシッピ川の河口にあるニューオリンズは、当時から重要な港湾都市であった。主に、穀物、綿花など、農産物の輸出港として発展し、また軍港としても、アメリカにとって最要所であった。

ある日、そのニューオリンズに、レフティと嵐三郎の姿があった。汽車と船を乗り継いでの長旅だった。

レフティの目的は、言わずもがな大統領任務。嵐三郎は、遙々日本からこの地にやってくる、義父かも知れぬ人物に会うためだ。

レフティの任務は大変だな、と嵐三郎は思う。現地の市民生活に

溶け込み、政治の不满分子たち、反政府団体、秘密結社などの規模、場所、動向を探り、情報部に報告する、それが彼の仕事だ。だが、彼はいたって気楽で、観光客気分なのだ。

二人は都市の中心部、フランス領の名残りを有す情緒纏綿の街、フレンチ・クォーター内に部屋を借りた。近くには紅燈街ストリーヴイルがある。着いた早々から、レフティはその辺りにせつせと通い始めた。早朝から出かけ、深夜帰宅はいつも通り。一週間ほど帰らぬこともあった。

アメリカに渡って十数年、異国の文化すべてに、目を見張るばかりの嵐三郎だが、このニューオーリンズはもつともつと驚きの連続であった。

嵐三郎は別にすることもないので、何となく街をぶらついた。今まで見知ったどの都市よりも異人種が混在していると感じた。白人、黒人、中南米人。レフティから教わったフランス人と黒人の混血、クレオール。僅かだが東洋人もいるという。

「どこよりも黒人が多い街だな」

嵐三郎が言うと、

「彼らはアフリカから連れて来られた奴隷の子孫だ。そう、ついこ

の間まで奴隷だった者も大勢いる」

「軍人も多い」

「そりゃ、海軍の最重要港だからな」

レフティは、物珍しきで目を丸くする嵐三郎が面白いらしく、暇ができるまで街に連れ出した。

利口で人懐っこいレフティは、結構、女にもてる。白人女性ばかりではない、黒人女性にも人気があるようだ。彼は画帳を携え、街中いたるところを歩き回り、楽しそうに絵を描く。その絵は実に生き生きと描かれている。また、地元の新聞に個人記者として記事を投稿する。その記事には洒脱な文章と描いた絵も載っている。本当に多才で、不思議な人物だと、嵐三郎はつくづく思った。

この街で一番びっくりしたことを話そう。

レフティに連れられて街の目抜き通りを歩いたときのことである。バーボン通り、ベイジン通りなど、各大通りの十字路、四辻などで、二人は黒人たちが繰り広げる音楽に出くわした。交差する十字路に荷馬車が止められる。二台、三台、或いは四台、その馬車の荷台が彼ら黒人たちの演奏舞台となる。続々人が詰めかけて群衆となる頃、荷台の上で順番に演奏が始まる。

軍楽隊が使う楽器を、それぞれ思い思いに手に持ち、演奏が始まると、それに合わせて観衆も叫ぶように歌い、踊りだす。大音響の楽隊と観衆の歓喜の歌声が響き渡り、街中がお祭りでも始まったかのようなようである。

「音楽合戦さ」

レフティが話す。

「各音楽隊がそれぞれ交代で演奏する。その中で一番を決めるんだよ」

「どうやって決めるのか」

嵐三郎が問いかける。

「一番音のでかい奴、一番観衆に受けた楽隊、そのリーダーがキングの称号を得られる」

「ふうん、それにしても物凄い音だ」

耳を劈く音響に、嵐三郎も最初は驚いた。しかし、時間が経つにつれて、音にもだんだん慣れてきた。彼らの繰り出す音の拍子に、いつの間にか心が浮き立ち、身体も自然に揺り動いていた。

黒人の男たちは、普段は農場労働者、港湾人夫として働き、女は白人屋敷の女中などをして生活している。労働を終えたあと、或い

は貴重な休日などは、こうやって街の大通りに集まり、音楽、踊り、酒を楽しんでいるのだ。

一番群衆が集うコンゴ―広場には、街一番と自負する音楽隊が多数集結、一大音楽合戦が繰り広げられた。勝ち抜いて、一番になった英雄には、観衆からキングの称号が与えられた。

レフティは、キングの称号を得たラツパ吹きの若者とすぐに仲良しになった。

そのラツパはコルネットという。それを吹く青年は、バデイといった。すらりとした長身で精悍な顔つき、気も強そうだ。彼には、いつも付き従う年下の若者が二人いる。名はフレディとジョー。二人はいつも兄貴分のバデイについて回った。コルネットを上手く鳴らせるように習得して、いつか自分もキングになろうとしている。バデイは二人を可愛がり、いっぱい大きい音を出して、遠くに飛ばせる方法を教えていた。レフティのお蔭で嵐三郎も、彼ら三人と仲良しになった。

バデイたち三人は、レフティの相棒嵐三郎が、遥か東洋からやってきたと知り、興味本位ですぐに打ち解けた。彼らの父母、祖父母たちは、遠い祖国アフリカから、奴隷として無理やり連れて来られ

た。祖国に思いを馳せる、どこか似た境遇で、心が繋がっているせいかも知れない。

ある日、レフティと嵐三郎は、ミシシッピ川の対岸、アルジャー村に行ってみた。

フランス領時代、領民たちはミシシッピ川を、祖国フランスから見る地中海になぞらえて、向こう岸は植民地アルジェリア、即ちアルジャーだと名付けた地域。

そこには黒人住居が点在し、労働者たちが生活していた。その日はバデイが案内してくれた。レフティが興味津々で、どんどん奥深く入っていくので、バデイが不安げについて歩く。ある古い墓地に、行こうとしたレフティに、

「そっちは駄目だ、入るな、その先は亡霊の聖地だ」

と、バデイが慌てて止めた。

「おいおい、亡霊に聖地があるのかい」

レフティが笑い出した。

「とにかく、ここから先は入ってはいけない。そういう所があるのだ、この土地には」

バデイの話によると、その辺りはいわゆる古戦場。ニューオリン

ズの戦いで知られる米英戦争、国を二分した南北戦争、いずれも激戦地であった。米軍、英軍、北軍、南軍、戦死した兵士の残骸が埋もれているという。風雨に晒され地下に眠る兵士たち。時に亡霊と
なって現れることも稀ではないそうだ。黒人たちはその一帯を亡霊
の聖地として、決して足を踏み入れないということであった。

バディと別れて、レフティと嵐三郎は、川を渡りフレンチ・クオ
ーターに戻ってきた。

その夜。

「おい、ランジー、お前は亡霊を見たことあるかい。日本にもある
んだろ、亡霊の話」

トウモロコシを原料に造る地酒バーボン・ウイスキーを飲みなが
らレフティが話しかけた。

「幽霊は見たことはないが、いろいろな怪談はある」

嵐三郎が答えた。

「話してくれ、俺は日本の怪談を聞きたい」

レフティがあまりにしつこく聞くので、

「大して知っている訳ではないが」

と嵐三郎が話を切り出した。

「この国の南北戦争のように、日本にもその昔、源氏と平氏の国を分ける大戦おおいきがあった。結果は源氏が勝ち、平氏は滅んだ」

「ほう、それで」

レフティは、物書きらしくペンを取り出し、書き留めていく。

「東西南北、あちこちに滅亡した平氏の亡霊が現れる話が残っている」

無言でレフティが続きを促す。

「例えば、ある地方の古刹、若い琵琶法師が夜な夜な奏でる琵琶の音色。それに魅せられた平氏の亡霊が、琵琶法師に取り憑く話」

「うんうん、琵琶法師というのか。続けてくれ」

「不審に思った老和尚が、深夜、琵琶法師のあとをつけ、一部始終を見届ける。彼を救うため全裸にし、その全身に魔霊退散の経文を書く」

「ちょっと待て、全身に経文書くと、どうなるんだ」

「平氏の亡霊たちには姿が見えない」

「なるほど」

経文の法力で琵琶法師の姿は消える。だが両耳だけ書き忘れたため、宙に浮く両耳のみが亡霊には見える。両耳を切りそがれた琵琶

法師の怪談を、嵐三郎は知っている限り話した。

レフティはこういった民話、怪談が大好きなのだと言った。嵐三郎は初めて知った。何かから何まで不思議な男であった。

「俺も日本に行ってみたくなった」

レフティがペンを置いて呟いた。

「おお、是非とも日本に来られよ」

嵐三郎も嬉しそうに答えた。

ニューオーリンズは一年中蒸し暑い。

レフティは相変わらず情報収集のため出歩き、暇があると街を描き、新聞に記事を載せ、楽しそうに過ごしている。そして嵐三郎と一緒に黒人たちの演奏する音楽を楽しむ。馬車の荷台上で繰り広げる音楽合戦では、相変わらずバディがキングとして君臨している。力強い大きな音、柔らかくて優しい音、自在に操り聴衆を魅了する。弟分のフレディとジョーも入れ替わり舞台上上がる。二人とも大きな音で巧みに吹奏し、観衆から喝采を浴びている。そうして一年が過ぎ、とうとう待ちに待った日が来た。

再会

ニューオリンズ市ミシシッピ川、川沿いに大会場が設営され、いよいよニューオリンズ万国博覧会が開催される運びとなった。港には世界各国の派遣団と出品物を乗せた船が、続々と入ってきた。そして、いよいよ日本国明治政府の派遣船が姿を見せ、ゆつくりと入港した。

港に出向いた嵐三郎とレフティ。嵐三郎は日本船から下りてくる団員を、一人一人目で追った。この人は違う、これも違う、探す嵐三郎。

暫くして、一人の老人が、大きな荷物を両手に持ちながら下りてきた。遠くを見つめる顔に覚えが。老人と嵐三郎の目が合った。

「義父上」

「嵐三郎」

同時に叫んだ。

嵐三郎が駆け寄ろうとすると、傍にいた警備員が警笛を鳴らし制止した。レフティが割って入り、状況を説明する。嵐三郎は、レフティにそれを任せて、老人に向かって走った。

服部儀左衛門が立っていた。

「嵐三郎、生きておったか」

「はい、義父上、お目にかかりとうございました」

二人はがっしり抱き合った。

「無事で良かった。よう生きていてくれた」

儀左衛門は、声を振りしぼり、身を震わせた。

あとは声もかすれ、溢れ出る涙を拭うことも忘れて、嵐三郎の手を握りしめた。

「義父上、いたくご心配をおかけしました。申し訳ございません」

「儂と千尋は、そなたが生きておると、無事でおると、信じていたぞ」

「千尋は元気でしょうか」

「おお、息災でいる」

それを聞いて嵐三郎は、ようやく落ち着きを取り戻した。

儀左衛門と再会した嵐三郎は、恩人のレフティを紹介し、ひとま
ず引き揚げた。

翌日、嵐三郎一人、万国博覧会が開催される会場まで足を運び、
日本館となる建物の中に儀左衛門を訪ねた。二人は長時間かけて過
ぎ去った時を語り尽くした。

「え、子供、私の」

「そうだ、そなたの子、孝一郎、儂が名付けた」

嵐三郎は仰天した。千尋との間に男子が生まれていたのだ。

咸臨丸で出航したのち、千尋が懐妊。嵐三郎の子を身籠っていたのだ。そして、健やかな男児が産まれた。儀左衛門は大いに喜び、嵐三郎に代わって孝一郎と名を付けた。今や元服の儀式は無く、そのまま成人して勉学に励んでいる。

自分は知らぬ間に父親になっていた。嵐三郎の目に涙が溢れた。

「どうだ、良き名であろう」

「はい、誠に良き名、ありがとうございました」

儀左衛門が誇らしげに頷いた。

嵐三郎は流れた歳月の重みをひしひしと感じていた。

このあと嵐三郎は、儀左衛門から兄の死を知らされる。

明治維新、討幕運動が頂点に達し、官軍が江戸に侵攻。双方の代表者、西郷隆盛、勝海舟が会談、江戸城無血開城となる。しかし、それを不服とする幕府軍残党、彰義隊が上野に立て籠もり抵抗する。直参旗本の身分上、嵐三郎の兄も参加。押し寄せる官軍、兄は銃弾を浴びる。倒れる寸前、太刀が投げられ、官軍の将の印、白獅子兜が、首ごと吹っ飛んだという。

「家伝投げ太刀……兄上が討ち死に」

嵐三郎が力なく呟いた。

残された義姉と二人の男子は、江戸を逃れて、親類を頼りに奥州まで落ち延び、その地で平民としてひっそり暮らしているという。

義姉と子は無事、嵐三郎はほっと胸を撫で下ろした。

儀左衛門の話は続く。

藩主が朝廷に恭順の意を表したため、松江藩は幕軍に加担をしなかった。儀左衛門と千尋母子は郷里に帰り、激動の政変を静観しながら、身を守ることをだけ考えた。千尋は、嵐三郎が必ず生きて帰ると信じていた。それを知って手助けしたのは勝海舟であった。

勝海舟は米国に置き去りにした嵐三郎を、何とか帰国させたいと努力していた。幕府の重職の身であった海舟は、いわば朝敵。しかし、彼のずば抜けた世界観と才覚には、明治政府の閣僚も一目置いていた。中にはこの類い稀な碩学を放っておく手はない、彼の英知は政府に必要と訴える者も現れた。かくして海舟は明治政府にも重用されることになった。折しも、米国ニューヨーク市にて開催される万国博覧会に、日本も出品と決まったとき、海舟はここぞと動いた。

「麟太郎さんが手助けを」

嵐三郎の眼が光った。

「そうだ、勝先生は明治政府に、儂の遠縁に当たる服部重太夫殿を、万国博覧会団長に推挙した。それがすんなり決まると、団長に随行する通訳として、この老骨を推薦した」

「通弁役、いや通訳ですか」

「異例な事とはいえ、政府を通して米国関係庁に、日本派遣団員の名簿を送付したのも、勝先生の計らいである」

「そういうことでしたか」

「そなたを知る関係者の目にとまるよう、仕向けた勝先生の深謀遠慮である」

「確かにその情報は、友人の手を借りて私の元に届きました」

嵐三郎は、別れ際の麟太郎の悲壮な顔を思いだした。

「麟太郎さんがそんなことまで、あの人らしい。確かにあの人ならやってくれます」

「そうだ、勝先生はそなたを見放したりはせぬ。そういうお方だ」

儀左衛門は続けて、

「そのような訳で、儂はこの国にそなたを迎えにきた」

今度は嵐三郎が話す番だ。

米国の政治家夫妻に命を救われたこと、世話をしてくれる今や親友のレフティのこと、いろいろ話し続けた。

「不思議な縁だのう。その政治家が今や大統領とは」

儀左衛門も目を丸くして、嵐三郎の話に聞き入った。

義父と再会を果たしたあと、嵐三郎はレフティの承諾を得て、万国博覧会日本派遣団の通訳として、帰国まで手伝うことになった。

大統領暗殺

数カ月経ったある日、レフティが重大な事を知らせに、日本館にやって来た。万国博覧会も後半に入り、大盛況の内に恙なく終了の予定。嵐三郎たちは帰国の準備に取りかかっていた。

「おい、ランジー、フランク・A大統領が、南部遊説のついでに、この万国博覧会も視察することになった」

「大統領がニューオリンズに。警護が大変だな」

嵐三郎が言うと、

「その通り、南部出身ではないから敵が多い。白人至上主義者たちには嫌われている。また暗殺があってはたまらん。政敵の動向など、

確かな情報を集めなければ」

レフティが答えた。

二人なりに暗殺に備えた策を講じてみる。

「刺客が使うのはおそらく銃だ、遠くから狙うか、近づいて撃つか。

宿泊先は警護隊でがっちり固めてるから心配ない」

レフティが考えを巡らす。

「大通りパレード時、歓迎式典の演壇上。やはり難しいのは主要な通りだな。或いは博覧会の会場内。この辺りも危ないな」

「なるほど、人が集まるときか、群衆に紛れて近づくか」

「そうだな、或いは建物に潜んで上から狙う」

「私にとっては大恩あるご夫妻、我が身に代えてもお守りしたい」

「おいおい、奥さんと子供が待つ身だぞ。死ぬわけにはいかん」

「さはさりながら、これでも武士の端くれ。大義に死するは武士の

本懐」

意味を理解したレフティが、

「武士道精神か。いいこと言うな、ランジー」

と、いつもの人懐っこい笑顔に戻った。

数日後、レフティの許に意外なところから情報が入った。コルネツ

ト・キング、バデイからであった。

バデイの話によると、彼の従姉が大農園主の館で女中をしているという。その農園主邸には、ここ数日いろんな白人客が頻繁に出入りしている。庭園での宴会後、従姉が後片づけをしていると、その客たちの会話が聞こえてきた。宴会後に残った客数人のひそひそ声の中に、ふと、暗殺、という言葉が聞こえた。耳をそばたて聞いた従姉によれば、

「大統領を狙撃するには、パレードか博覧会、二か所しかない」

「そう聞こえたと言う。」

レフテイの左眼が光った。

「バデイ、よく教えてくれた。俺たちは大統領を守りたい。もう少しその娘さんに、探りを入れてくれるように頼めないか」

「オーケー、簡単なことさ。俺は従姉以外にもたくさん仲間がいる。

そっちからも探ってみるよ」

「おい、危ないことはするなよ。ばれたら命はないぞ」

「レフテイ、俺たち黒人は白人社会で生きてるんだ。いつだって命がけさ。大丈夫、任せろ」

「頼もしいな、キング」

レフティは、バデイの肩を叩いて言った。

「パレードだと、バーボン通りかな」

嵐三郎が言うと、

「たぶんな、密かに情報部に伝えておこう。暗殺計画あり、パレードは警護が難しい、中止を願うと」

その日から、レフティは精力的に動きだした。どこの地方にもある宗教の保守系過激派、白人至上主義の秘密結社、退役軍人の保守主義者たち、反政府市民団体、数え上げれば枚挙に暇がないほど。大統領暗殺を企てるのは、どの不満分子なのか、判断が難しい。だが、レフティという男は、市民に混じって情報を拾い出すのに、しただたかな知恵を持っている。バデイと従姉、仲間たちからの情報収集手段もその一つだ。

バデイから決定的な情報が入った。暗殺計画は白人教会の過激組織の一つ、白人至上主義団体であるという。そして団体会員の中から、二人の元軍人狙撃手が選ばれたという。

「やっぱりな」

レフティが呟いた。

「レフティ、ネタはここまでにしてくれ。これ以上は従姉たちが危

ない」

バディが言った。

「分かった、これでおしまいだ。ありがとう、バディ」

「上手くやれ、無事終わったら、ラップでバーボン吹き飛ばしてやる」

「おいおい、もったいない。飲みながらシミードダンスだ」

「レフティがシミードダンス、こりや、いけるよ」

傍らで聞いていた嵐三郎は、思わず吹いてしまった。黒人たちが集まるコンゴ広場で、音楽に合わせて男女が踊る、シミードダンス。彼ら特有の踊りを思い出したのだ。

屈託ない三人の笑い声が響いた。

数日後。

「ようし、パレードは中止だ。狙うとしたら万国博覧会の会場内、たぶんスピーチの演壇上だな」

レフティが言った。狙いを定めた言いぶりだ。当てずっぽうに聞こえるが、レフティは違う。彼は緻密な計算ができる男だ。

「何故か分かるか、ランジー」

レフティが真顔で言う。

「大統領というのは、この国の元首だ。一番勇気のある人物が選ばれるべき、国民はそう思っている。万国博覧会は世界中の国々から人が集まる。つまり、世界が見ている。臆病な素振りには絶対見せられない。警護も必要なしぐらいの度胸も必要なのだ」
にやりと笑って、

「だから連中は、警護の手薄な会場内を狙う」
彼の判断はいつも正しい。いろんな事を言い当てる、不思議な男なのだ。彼が言う以上、会場内なのだろう。嵐三郎はそう思った。

ついに、アメリカ合衆国大統領夫妻が、南部遊説を終えて、ニューヨーク万国博覧会視察のため、やってくる日が来た。

市庁迎賓館公邸での歓迎レセプションや、南部の政治家、土地の名士たちが集つての歓迎パーティーなどが賑々しく開催された。

大統領警護は万全で、一分の隙もないように見える。明日午後からは、ミシシッピ川沿いに設営された、万国博覧会の視察に赴くことが発表された。

「いよいよだな、厄介ごとが始まるぞ」
レフティが気を引き締めるように言う。

「何も起こらなければいいが」

「起きる。無事済んだらランジー、お前も拝謁の栄誉を受けるかもな」

「まさか、拝謁など、一介の日本人に」

「そうでもないさ、ご夫妻はお前のことを気にかけておられた」

「それでもお目にかかれまい。今となつては、お立場が違う」

「ふふ、大統領はそんな心の狭い方ではない」

レフティの左眼は笑っていた。

バデイの情報によると、狙撃手は二人だという。入場検査は厳しく、手荷物は持ち込めない。長い狙撃銃は無理とすると、拳銃、ナイフか。それも服装検査で見つかる。レフティは、刺客があらかじめ銃を、どこかの会館内に隠していると考えた。

それは容易なことだ。アメリカ、イギリス、フランスなど、怪しまれない白人中心国の出品館があるのだから。

「どうやって阻止するのか」

嵐三郎が訊くのに、

「二人手分けして見つけ、狙う前にやっつける」

レフティは不敵に笑った。

「大統領を狙うとしたら、スピーチのとき。つまり、演説の壇上。」

その近くの会館と見た」

「間違いないか」

「俺を誰だと思おう」

「そうだな、レフティ。君はすごい男だ」

「ははは、冗談だよ。俺も不安なんだ」

レフティは一瞬笑い、厳しい顔になった。

「大統領の強運を祈るか」

呟いて、レフティが天を仰いだ。

「出かけるぞ」

レフティが声をかけ、

「承知」

嵐三郎が答えた。

ニューヨークの空は今日も雲一つない晴天だった。

万国博覧会、嵐三郎はいつものように会場内の日本館に入った。

団員控室へ向かい、中に入ると、自分専用の洋式棚がある、その扉を開けた。大事にしまっておいた脇差を取り出して、脱いだ上着でくるみ、隠し持った。

日本を発つとき、武士として携えた日本刀。過ぐる日、フランク・

A 大統領に大刀は献上したが、脇差は大切に持っていた。

……人を殺めたくはないが、これが役に立つなら……。

脇差を上手く上着で隠し持ったまま、嵐三郎は足早に演説会場に向かった。

大統領の周りは、目立たぬように警護が張り巡らされている。刺客が近づくのは困難である。レフティと嵐三郎は、先ず、観覧者の中に怪しい人物を見つけようとした。いない。次は銃で狙える離れた場所、各国会館の二階、屋根。二人は必死だった。

大きな歓声と拍手が一斉に演説広場に鳴り響いた。大統領夫妻が入場してきたのである。

観衆に笑顔で手を振る大統領夫妻。だが、懐かしい夫妻の方を振り返る余裕は嵐三郎には無かった。反対の方角にいるレフティが、ひゅうつと口笛を吹いた。そっと左手を上げ、上方を指差す。同時に嵐三郎も左手を上げ、ある方向を指差した。

その時、耳を劈く大きな花火音が会場内に響き渡り、大統領歓迎式典は頂点を迎えた。

万国博覧会演説広場に面する東西の会館、それはイギリス館とフランス館であった。両館の二階、露台にはテントが張られている。

陽を浴びてうっすら人影が映る。両テントの隙間から銃口が覗く。それを見て取ったレフティと嵐三郎が、二つの館に向かって同時に走った。

フランス館の警備員たちは、大統領夫妻を迎える大歓声に気を取られて、嵐三郎が駆け込んでも気が付かない。脱兎のごとく嵐三郎は階段を駆け上がる。

レフティも同じように、イギリス館の階段を駆け上がっていた。普段は見せない必死の形相。上着の下には拳銃を忍ばせている。

レフティも夢中だった。

……絶対に撃たせない……。

心に叫んだ。

狙いをつけた部屋に音を立てずに入り、開いている窓から露台テントを凝視する。いた。銃を構えて潜む男。背後からレフティは猛然と突進した。男が振り向き、銃を向けるが、撃つ隙を与えなかった。先ず顔面に頭突きを食らわせ、ひるむ男を抱えて床に投げつける。苦悶で転がる男の頭を、レフティは右手に持った拳銃の銃身で殴りつけた。あっさりけりは付いた。男は気絶して動かなくなった。

レフティは男の狙撃銃を拾い、嵐三郎が走ったフランス館の方角

に目をやった。

嵐三郎が向かったフランス館は、レフティのイギリス館よりもやや離れている。嵐三郎は、レフティより遅れる自分に苛立った。

……焦るな……。

自分にそう言い聞かせた。

嵐三郎もレフティと同じく、狙った二階の部屋にそうっと忍び込み、露台に仮設したテント内の男を見つけた。用心深く男を見据え、隠し持った脇差を握りしめた。

足元に油断があった。落ちていた小物につまずき、小さな音を立ててしまった。テントの男が気づいて振り向く。眼と眼が合った。

男は銃口を向けた。咄嗟に嵐三郎も脇差を引き抜き、

「南無」

和言を叫んだ。

嵐三郎の右手から脇差が放たれた。同時に銃声が響いた。衝撃を受けて嵐三郎は、後方に吹っ飛び、倒れた。胸が見る見るうちに朱に染まっていく。

「抜かったは」

嵐三郎は激痛を堪えて言葉を吐いた。

頭を少し上げて相手の方を見た。嵐三郎が放った脇差は、狙撃手の右腕つけ根を貫いていた。男はもがきながら、テントを倒した。苦しそうに立ち上がるが、よろけて足を踏み外し、露台から落ちていくのが、嵐三郎の眼に映った。

家伝、投げ太刀であった。

「大丈夫、あ奴は死なぬ。この俺も」

消えゆく意識の中、嵐三郎は呟いた。

口中に溢れた水で咽びながら、意識が戻った。胸元に馴染みの匂い、気つけのバーボン・ウイスキーか。時間がどれくらい過ぎたのか。耳元でレフティが呼んでいるようだ。嵐三郎が目を開けた。レフティの顔が目に入った。

「ランジー聞こえるか」

嵐三郎が微かに頷いた。

「すべて片付いた。大統領ご夫妻は無事だ」

聞いた嵐三郎の眼が笑った。

「良くやったな、ランジー。日本に帰れるぞ。妻子にも会える」

嵐三郎はレフティに話しかけようと、懸命に力を振り絞って、声を出した。

「レフティ、頼みがある」

「いいから喋るな。今医者が出る。手当をしてお前は助かる」

「いや、聞いてくれ。もしも俺が死んだら、せめて、遺髪だけは妻子に届けたい。義父にそう言って渡してくれ」

「おい、情けないぞ、ランジー。大丈夫だ、死なない」

「レフティ、日本に来てくれ……いろいろ……ありがとう……」

それが嵐三郎の最期の言葉であった。

旧幕臣旗本、外国奉行方、通弁役。咸臨丸乗組員。里見改め服部嵐三郎は、異国の地、アメリカ南部ニューオリンズにて、その波乱の生涯を終えた。

かくして、前代未聞のニューオリンズ大統領暗殺事件は、二人の活躍で未遂に終わった。

嵐三郎の亡骸は、日本に運ぶことは到底叶わず、フランク・A大統領の計らいで、ニューオリンズ近郊の公営墓地に埋葬された。

過密日程の都合で、大統領夫妻は参列できなかったが、代理人による丁重な賛辞と感謝のこもった弔辞が読み上げられた。埋葬には日本国派遣団一同も参列した。団長服部重太夫の横で、義父儀左衛門も手を合わせていた。悲しみで、悄然とうなだれたその姿は、見

る者の涙を誘った。

レフティは、少し離れた場所から一步も動かず、ただ棺を見つめていた。

万国博覧会も終了し、日本国派遣団一行は予定より少し遅れて帰国することになった。

当日、帰国船を見送りに来たレフティに、儀左衛門が話しかける。

「お世話になりました。厚く御礼申し上げます」

「お元気で」

レフティは口数少なく答えた。

別れ際に、儀左衛門が、

「いつか日本にお越し下さい。我が故郷、松江にてお会いしたい。

何より嵐三郎が喜びます」

「ありがとうございます。必ず参ります。約束します」

レフティが、力強く答えた。

やがて、出航合図の汽笛、長声一発。船がゆっくり動き出し、船上から手をかざす儀左衛門。懐には嵐三郎の遺髪。万感を込めてレフティに手を振る。岸壁で手を振ってそれに応えるレフティ。

こうして、一行を乗せた日本船は、ニューオーリンズ港を離れ、帰

国の途に就いた。

数年の歳月が流れたある日。

夕日を浴びて、ニューオリンズ港から出航する大型客船があった。まばらな乗船客に混じって、船上からじっと港の明かりを見る、レフティ・ジョーンズの姿があった。

遠く、黒人の若者二人が、こちらに向かって走ってくるのが目に入った。近づく二人を確認して、レフティは笑みを浮かべた。

「ここだ」

レフティが声を出し、手を上げた。

「レフティ、本当に行くのか」

叫んだのはフレディであった。共に走って見送りに来たのは、ジョー。

「ああ、行くさ。日本へ」

レフティが大声で答えた。おや、バディがいらない、ふと気になり、

「おい、バディはどうした。来ないのか」

「バディは気が触れて、精神病院だよ」

聞こえたレフティは、左眼を丸くした。

「大丈夫、すぐ抜け出してラッパを吹くさ。レフティのシミーダン

スもまだ見てないし」

レフティは吹き出した。

「そうだな、踊ってない。気が触れるとは、あいつらしいな」

バディの顔を思い出して、レフティは大きな声で笑った。

つられてフレディとジョーも笑った。

「バディによろしく言ってくれ。またな、フレディ、ジョー。見送りありがとう」

「レフティ、元気でな」

二人も明るい声で答えた。

夕日に光輝く客船が、出航を告げる汽笛と共に進み始めた。

フレディとジョーに手を振りながら、

……ランジー、日本に行くぞ……。

レフティは、心で叫んだ。

その時、いきなりラツパの音が鳴り響いた。

フレディとジョーが、自分たちのコルネットを手に持ち、思い思いのフレーズで吹き始めたのだ。曲は同じなのだが、それぞれの感情で強く吹いたり、優しく吹いたり、正調であったり、わざと外したり、自由自在の音を操り、楽しんでる。お馴染みの、彼ら特有

の音楽だ。

……これが彼らの別れの曲か……。

レフティは、嬉しそうに二人のコルネットの演奏を聴き入った。

心に沁みる音色、魂を揺さぶる別れの曲。夕日に染まり、輝く海。

点々と見えるニューオリンズの街の灯。全てが美しかった。

船が港をゆっくりと離れていく。コルネットを吹く二人も、音色

と共に遠ざかり、その姿も小さくなっていく。

レフティは、遠くを見つめながら、叫んだ。

「いざ行かん、日本へ」

完